

審査の結果の要旨

氏名 篠田 有子

家族の間で、「誰が誰とどのような位置関係で寝るか」。本論文は、日本の家族の就寝形態に焦点を当て、家族間の情緒面を中心にした人間関係と子どもの発達との関係を社会的に究明しようとするものである。乳幼児を持つ日本の家族の就寝形態は、どのようになっているのか。子どもの成長や子ども数の変化に応じ、どのように変化していくのか。就寝形態のパターンは、幼児の発達にどのような影響を及ぼしているのか。また、これらの関係は、時代の変化とともにどのように変化したのか。1960年代にアメリカの人類学者によって、日本の家族が共寝という特徴を持つことが指摘されているが、家族の就寝形態とその変化、さらには幼児の発達への影響という問題については、教育社会学においても家族社会学においても、これまで十分な検討が行われてこなかった。本論文は、20年以上にわたる様々な調査データの分析を通じて、これらの問いに実証的に答えるものである。

本論文は、6章で構成される。序章では、コーディルらの先行研究の批判的検討を通じて、「誰が誰と寝るか」に加え、「どのような位置関係で寝るか」がより重要な問いであることが、論文を貫く基本的な問題として設定される。1章では、乳幼児をもつ若年家族の就寝形態について、その実態を縦断的調査により明らかにし、5つの類型と、それらが時間の変化に伴いどう変化していくのかを解明する。2章では、子ども数が増えても、就寝形態に反復性があることが示され、その知見をもとに、家族成員間の関係には、家族ごとに情緒面での一定のパターンがあることが指摘される。3章では、夫婦間の就寝形態に焦点を当て、それが夫婦間のコミュニケーションや親密性と関係していることが示される。4章では、質的分析と統計的分析を併用して、就寝形態と乳幼児の発達の関係の解明に迫る。その結果、母子間、父子間、夫婦間の距離がそれぞれ近い家族類型において、自発性や社会性の発達に好ましい傾向があると指摘する。5章では、1980年代から現代にいたる就寝形態の変化を分析し、日本の家族に多く見られる就寝形態が大きくは変化していないことがまず示され、この知見と4章までの分析結果をふまえ、本論文のまとめと理論的考察を行っている。そこでは、共寝という、家族の就寝形態が家族の情緒構造の表現型であるという視点から、日本の家族の情緒構造は、親子一体性を基本としていることが指摘され、その功罪について検討が行われる。

以上のように、本論文は、長年にわたり著者が実施してきた調査の分析を通して、家族成員間の関係、子どもの発達への影響、その変化を、就寝形態に着目して解明したという点で、すぐれた独創性をもつ。統計手法や理論的検討においては、さらなる工夫の余地があるとの指摘もあったが、実証分析をもとに、就寝形態に焦点づけて家族の情緒面の関係を解明した点で、教育社会学のみならず、今後の教育研究に広く貢献するものと評価された。このような点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。